

二〇一七（平成二九）年二月一八日（土曜日）
フョイエルバッハを読む会（第一回 白十字の会読書会）発表レジュメ

フョイエルバッハ『キリスト教の本質』

——ヘーゲル左派の継承者、マルクス主義の源流という位置づけの再検討——

独立系研究者* 倉井 香矛哉

一．はじめに

ルートヴィヒ・アンドレアス・フョイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach, 1804年7月28日 - 1872年9月13日) は、ドイツの哲学者。青年ヘーゲル派の代表的な存在である。刑法学者のアンゼルム・フョイエルバッハの四男。

ゲオルク・ヴィルヘルム・フリードリヒ・ヘーゲルの哲学から出発し、のちに決別。唯物論的な立場から、特に当時のキリスト教に対して激しい批判を行った。また現世的な幸福を説くその思想は、カール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスらに多大な影響を与えた。(Wikipedia 参考)

フョイエルバッハの名著を読むにあたって、まずは、彼の哲学に対する通説を確認することにしたい。一例として、右に引用した Wikipedia の記事によれば、フョイエルバッハは「青年ヘーゲル派の代表的な存在」として位置づけられている。この「青年ヘーゲル派」とは、ヘーゲル左派とも呼ばれ、ヘーゲルの（宗教と同一化された）哲学体系を肯定的に継承する右派、あるいは中間派に対し、ヘーゲル哲学を批判的に継承する思想的潮流のことを指している。以下、フョイエルバッハは「ヘーゲルの哲学」から出発し、「唯物論的な立場」から「当時のキリスト教」に対して「激しい批判」を行った、という通説に基づき位置づけが示されている。しかしながら、『キリスト教の本質』においては、「感覚」の作用に基づく「人間学」という別の意味づけを行うことも可能であり、実際に、著者はこの側面を強調している。

同時に、「現世的な幸福」を説くことによって「カール・マルクスやフリードリヒ・エンゲルスら」に「多大な影響」を与えた、とされている。たしかに、マルクス・エンゲルスの「フョイエルバッハ論」にも表れているように、フョイエルバッハが後世のマルクス主義に影響を与えていることはたしかである。しかしながら、フョイエルバッハは政治的な活動からは一線を画しており（一八四八年のパリ革命の影響から、一時は代議士になる意欲はみせるものの頓挫し、その後、宗教研究に注力するようになる）、後世のマルクス主

義の系譜に引きよせるかたちでの評価には恣意的な側面があるのではないか、という指摘を加えることもできる。実際に、二〇世紀後半から現在に至るフョイエルバッハ研究史では多様な側面からの考察が試みられており、前述のようなヘーゲル左派／マルクス主義の系譜に位置づける見方だけでは、彼の思想的な傾向を十分に汲み尽くすことはできない。

また、宇都宮芳明『フョイエルバッハ 人と思想70』（清水書院、一九八三年一月）によれば、フョイエールバッハは、「父親はプロテスタントであったにもかかわらず」、「カトリックの儀式にしたがって洗礼を受けた」という。それは、彼の出生地ランツフートを支配していたバイエルン侯国が古くからカトリックの国であり、当初はカトリック信徒以外の者は住むことができなかったからである。一八〇〇年に信仰の自由が認められて以降もなお、カトリックの宗教的伝統は根強く、フョイエルバッハの父親は迫害や試験を受けた。なお、フョイエルバッハは一六歳の頃から聖書に親しんだとされる。またそれは、宗教教育や堅信礼教育、あるいは宗教的薫陶から出たものではなく、「純粋に自分の胸からわき出た」とされ、「宗教を生涯の目標と天職にえらび、神学者になろうと決心した」とされる。このような彼自身の生育環境や、同時代のヨーロッパにおける宗教および政治的な状況を抜きにしては、その思索の成立条件を十分に読みとることはできない。

先行研究の傾向の一端としても、藤巻和夫のように、ヘーゲル左派やマルクス主義と結びつけるかたちで論じられることの多かったフョイエルバッハ研究に関して、フョイエルバッハ自身の哲学を深めようとしたものがある。そのほかにも、寺田光男「三月前革命期におけるフョイエルバッハの問題」、『思想』五五九号（岩波書店、一九七一年一月）のなかでは、「ほとんどただ青年マルクスの思想形成の一モメント」としてのみ研究されてきたフョイエルバッハの思想を「特殊ドイツ的な近代化のなかで再評価」することの重要性を指摘している。そのほかにも、とくに一九七〇年代以降、フョイエルバッハ研究は大きな変化を遂げてきたとされる。河上睦子の概説にもとづいて記述するならば、それは、「文献学上の問題」、そして、「従来のイデオロギー解釈からの解放」という二つの要因が関係しているとされる。また、その後、マルティン・ルターとの関連性など、キリスト教界からの積極的な研究も進んだとされている。それゆえ、フョイエルバッハの哲学は、もはや「ヘーゲル圏」、「マルクス前史」だけではない独自の哲学として位置づけられつつある。その一例として、汎神論、宗教批判の方法論、他我論、哲学史、感性概念や理性概念の再考、啓蒙主義との関係、自然思想（環境思想やエコロジー思想など）との連関性、性差論（フェミニズム理論）との連関性などが挙げられる。

二．本読書会の目的

今回の読書会では、フョイエルバッハの名著である『キリスト教の本質』を読むことを通じて、従来の研究史における通説を確認するにとどまらず、二一世紀の社会において、フョイエルバッハの言説がどのような意義を持ちうるのか、という積極的な意味づけを行うことにしたい。

三．「緒論」「第一章 人間の本质」を理解する

フオイエルバッハは、本書の「緒論」第一章「人間の本质」において、「宗教は人間が動物に対してもっている本質的な区別に基づいている」と規定し、この「本質的」な「区別」は「意識」である、と定義している。また、「最も厳密な意味での意識はただ、自己の類・自己の本質性が対象になっているところの存在者のところにあるだけである」とも付言している。↓人間には意識がある。

フオイエルバッハは、「動物はただ一重アインフアラツトの生活を送るだけであり、人間は二重ツワフアラツトの生活を送る」、すなわち、「動物の場合には内的生活が外的生活と合一しているが、人間は内的生活および外的生活を送る」という前提を語っている。この箇所については、概略として、人間には、他の動物にはない内面がある、と理解すればよいのではないか。↓人間は、内面／外面という二重の生活を送る。

フオイエルバッハは、人間の本质について、「理性・意志・心情」を挙げている。これは、イマヌエル・カントの認識論を継承するものであり、フオイエルバッハの思想の大枠はカント哲学の流れを汲んでいるということを理解することができる。↓カント認識論における「理性・意志・心情」の継承。

また、「人間は対象がなければ何者でもない」とも指摘している。すなわち、「人間は対象において自己自身を意識する」という前提をもとに、フオイエルバッハは、「意識とは自己確認であり、自己肯定であり、自己愛であり、自己自身の完全性に対する喜びである」、あるいは、「意識は或る完全な存在者を特色づけるしるしである」と定義している。↓対象化、対象と自己の関係性における意識の把握。

↓これらの論述をもとに、フオイエルバッハの哲学における論理的な布置を明らかにすることができると思われる。すなわち、人間の意識をカント認識論の枠組みに置いて把握するとともに、ヘーゲル哲学において前提とされていた自己の主観（精神、魂、自我）の实在性を相対化し、対象と自己の関係性において把握し直すものである。このような認識は、キルケゴールの実存的な思索にも批判的に継承されるとともに、マルクスの価値（本質）をめぐる議論にも影響を与えていると考えることができる。

同時に、フオイエルバッハの思想を唯物論の源流として位置づけることには、後世のマルクス主義の系譜に引きよせるかたちでの恣意的な理解が介在していると言つこともできるかもしれない。フオイエルバッハは、宗教的な営為を「感覚」に還元している。彼の思索は、あくまでも「人間学」なのであり、カント哲学を前提として、「対象」と「自己」の関係性における「意識」についての考察であった。そこには、マルクス主義との思想的な異同があるといえる。

四．「緒論」「第二章 宗教の本質」を理解する

フオイエルバッハによれば、「感性的対象に対する関係においてはたしかに対象の意識は自己意識から区別される」が、「宗教的对象の場合には意識「対象の意識」は自己意識と直接に一致する」と定義されている。なぜならば、「宗教的对象は人間のなかにあり、それ自身内面的な対象」だからである。↓宗教的对象を人間の内面に還元。

また、彼は、「宗教——少なくともキリスト教——は人間が自分自身に対して取る態度である」、「いっそう正しくいえば人間が自分の本質に対して取る態度である」とも定義している。この場合、「神の本質（存在者）」とは人間の本質以外の何物でもない」のである。↓ヘーゲル哲学の神学的前提のように〈神〉を外部に措定しない。

その説明において、「神の述語」、「主語」という用語が用いられている。↓カント哲学以降の主体Ⅱ主語 (subject) と対象 (object) の関係、同一性。

これらをふまえて、彼は、「人間は自分の本質を対象化し、そして次に再び自己を、このように対象化され主体や人格へ転化された存在者（本質）の対象にする」という定式をもって「宗教の秘密」であると定義している。↓宗教Ⅱ人間の自己対象化。

↓これらの論述からは、フオイエルバッハの定義する「宗教の本質」を概観することができる。すなわち、彼は、ヘーゲル哲学において前提とされていた外在的な〈神〉を相対化し、それを人間の対象化意識に還元した。また、それによって、宗教と人間にとっての自己対象化の営みであると位置づけた。

なお、ここで注意したいのは、フオイエルバッハの思索は、しばしば批判されるような「無神論」として片づけられるようなものではない、ということである。後述するように、彼は、教会権力によって打ち立てられ、また、ヘーゲル哲学が前提としていたような神学体系を批判している。しかしながら、人間の内面的な、生きた宗教心、信仰を否定しているわけではない。この点に留意しながら、以下、彼の宗教批判の内容を確認することにしたい。

五、「第一部 宗教の真実な本質——すなわち宗教の人間学的本質——」を概観する

「目次」

第三章 悟性の本質としての神

「宗教」＝「人間が自己自身と分裂するということ」、「人間と人間自身との葛藤」
「神」＝「悟性の本質が対象化されたもの」

第四章 道徳的存在者またはおきてとしての神

「宗教」＝「人間の最高の善」

第五章 受肉の秘密、または心情の本質としての神

「神の受肉 (Inkarnation)」＝「神をそれ自身人間的な存在者 (本質) として直感すること」

第六章 受難の神の本質

「人間化した神」、「人間的な神」(キリスト)の本質規定＝「熱情 (Passion)」
「悩み (受難)」＝「キリスト教の最高の命令」、「キリスト教の歴史」＝「人類の受難史」
「神は人間の鏡である」

第七章 三位一体と神の母 (聖母) との秘義

「三位一体」＝「人間が自己の全体性についてもっている意識」
(伝統的な三位一体解釈とは異なる)

第八章 ロゴスと神の似姿との秘密

「心情的感性的な存在者としての人間を支配し且つ浄福にするもの」＝「形像」、「空想」

第九章 神のなかにある世界想像の原理の秘密

「世界は神ではない」、「世界は神の対立物である」

第十章 神秘主義の秘密、または神における自然の秘密

第十一章 摂理と無からの創造との秘密

「創造」＝「神の言葉がいいあらかわされたもの」＝「意志の産物」(＝意志の神性)

第十二章 ユダヤ教における創造の意義

第十三章 心情の全能、または祈祷の秘密

「ユダヤ教」＝「民族的な利益」、「キリスト教」＝「民族的利己主義から純化されたユダヤ教」
「キリスト教」＝「ユダヤ教の利己主義」を「主観性」に転換した。
「祈祷」＝「宗教の最も深い本質をあらわにしているもの」
「祈祷」＝「人間の心情が自分自身に対して——自分自身の本質に対して——取る態度」
「祈祷」＝「人間が自己を二つの本質 (存在者) へ分割すること」

第十四章 信仰の秘密——奇跡の秘密

「信仰」にとつては、「神」＝「なんらの制限ももっていない主観性だけ」が「存在する」

第十五章 復活と超自然的誕生との秘密

第十六章 キリスト教的キリスト、または人格神の秘密

「キリスト教の根本教義」＝「心情の願望がみたされたもの」
「キリスト教の本質」＝「心情の本質」、「意志と行為との直接的統一」
「キリスト」＝「眼に見える神性」

第十七章 キリスト教と異教との区別

「キリストは、キリスト教を異教から区別するものである」
「キリスト教のなかには類という概念がまったく不在である」

第十八章 在家の独身生活と修道院生活とのキリスト教的な意義

第十九章 キリスト教の天国、または人格の不死

「人間は宗教の始めであり、宗教の中心であり、終りである」

六. 「第二部 宗教の真実でない本質——すなわち宗教の神学的本質——」を概観する

「目次」

第二十章 宗教の本質的な立場

「宗教の本質的な立場」＝「実践的な立場」、「主観的な立場」

「宗教の目的」＝「人間の福祉・救い・浄福」

「神」＝「魂の救いが実現されたもの」「人間の救いや浄福を実現する無制限な威力」

第二十一章 神の実存における矛盾

「宗教」＝「人間が自分自身の本質に対して関係すること」（緒論より）

「宗教に対する反省」（神学）＝「神の本質を（人間の本質とは）別な本質にし、人間の外部に引き出しておく」（神学に対する批判と、無神論の否定）

第二十二章 神の啓示における矛盾

「啓示」＝「人間の自己規定にすぎない」

「神」＝「本質——類——と個体との間のきずなが、人格化されたもの」

「神学の秘密は人間学以外の何物でもない！」

第二十三章 神の本質一般における矛盾

「神」＝「人格」であり、同時に「普遍的な本質（存在者）」でもある。

「神」＝「感性的本質」

第二十四章 思弁的神学における矛盾

（ヘーゲル哲学の「思弁的教説」に対する批判）

第二十五章 三位一体における矛盾

第二十六章 秘蹟における矛盾

第二十七章 信仰と愛との矛盾

「信仰は愛の反対物である」

「キリストは愛の意識として類、「人類」の意識である」

第二十八章 結論

「宗教の内容と対象」＝「徹頭徹尾人間的なもの」

「神学の秘密」＝「人間学」、「神の本質の秘密」＝「人間の本質」

「宗教に対するわれわれの関係はけっして単に否定的な関係にすぎないのではなくて、批判的な関係である」

↓これらの論点から、フォイエルバッハの宗教批判の内実が明らかになる。すなわち、彼は宗教を人間学として定義し、〈神〉の外在性を前提とする教会及びアカデミズムの神学体系を批判した。くわえて、ヘーゲル左派やマルクス主義の思想との異同を明らかにしつつ、フォイエルバッハ自身の思想的な特色を明確化していくことにしたい。

七. 考察（一） フォイエルバッハの神学批判と「真実」の信仰の探究

シュトラウスが一八三五年に『イエスの生涯』を発表したことをきっかけに、ヘーゲル学徒のあいだでは、宗教批判の気運が高まっていった。フォイエルバッハは、『哲学とキリスト教について』（一八三八年）において、哲学と宗教を区別した。これは、ヘーゲル哲学に対する批判というニュアンスももっている。同時に、彼は、宗教と神学を区別し、もっぱら後者を批判の対象としていたことにも注意する必要がある。

・宇都宮芳明『フォイエルバッハ 人と思想70』（清水書院、一九八三年一月）

フォイエルバッハは、宗教的心情に基づく素朴な信仰を、そのものとして否定するのではない。つまり神に対する信仰そのものを否定する無神論者ではない。だがフォイエルバッハは、神学のうちで抽象化された神に対しては、否定的な態度をとる。真実の信仰の対象となる神と、神学のうちで思考された神とは、別物なのである。

・澤野徹「L. フォイエルバッハの遺稿「日本の宗教」」、『専修大学社会科学研究所月報』No. 355（専修大学社会科学研究所、一九九三年一月）

研究史上、フォイエルバッハの思想は、我が国のみならず一般に『キリスト教の本質』（一八四一年）や『哲学改革のための暫定的命題』（一八四二年）、『将来の哲学の根本命題』（一八四三年）時点の初期フォイエルバッハに注目される傾向にあったように思われる。そうした傾向は、彼の思想をヘーゲル―ヘーゲル左派―初期マルクスの流れに位置づけ、また、初期マルクスや真正社会主義者ヘスやグリューンたちのドイツ初期社会主義思想に吸収されていくその前史の人物として位置づけてしまいがちであ

る。
しかし、フョイエルバッハ自身にとってはドイツ初期社会主義者たちのように宗教批判から政治や社会への批判に視座の転換をはかることよりも、宗教の批判を深め完成することの方がより重要な課題であった。

【参考視点】

なお、フョイエルバッハには、遺稿「日本の宗教」（一八四五年秋～一八四七年秋頃）というものがあ
る。その翻刻のなかには、「宗教。自然を超越しあるいは自然的諸力そのものに宿り、それを専横的
に統御しているより高い存在への信仰は、人間的心情の深淵のなかに根ざしている」と書かれている。ま
た、「日本帝国の設立者」としての神武天皇をはじめとする「最高位の太陽神の直系の子孫」についての
論述が行われているが、中国、インド、日本などの東洋世界の研究は、一九四八年一月から一八九九年
三月のあいだにハイデルベルグで行われた『宗教の本質に関する講演』にも利用されている。

この遺稿については、別に石塚正英による分析「フョイエルバッハと日本の古代的信仰——遺稿「日本
の宗教」の分析」、『神の再読・自然の再読 いまなぜフョイエルバッハか』（理想社、一九九五年二月）
もあるが、そこでは、「一九世紀におけるキリスト教批判の急先鋒であるフョイエルバッハ」に「フエテ
イズムの自然信仰の讃美者」としての側面が指摘されている。すなわち、「フョイエルバッハの人間学
的唯物論は、自然を存在者とみだてた上で、人々は人間（存在者）と自然（存在者）の交互的・相互的依
存において初めて生存できるのだという立場を採用し、かつその立場を無自覚的にせよ実行していたのが
諸大陸に生きづく古代的・野性的信仰者だということ」である、とされており、「フョイエルバッハは、
そのような古代的・野性的信仰にみられるフェティッシュ的性格を最大限称えたのだ」とされている。

↓フョイエルバッハの神学批判は、汎神論や宗教多元主義にむすびつけられるような傾向はあるものの、
けっして宗教そのものの否定につながるものではない。当時の教会及び神学体系に対する彼の辛辣な批判は、
「真実」の信仰を問うための彼なりの方法であった、ということもできるのではないか。

八. 考察 (二) 欧州政治とフョイエルバッハ

・柴田隆行「革命の批判的傍観者フョイエルバッハ——一八四八年の書簡から」、『情況』第三期第十卷
第一号（情況出版、一九九九年一月）一三四～一三五頁

「Vive la République! 共和国万歳! フランス革命が私のなかでも革命を引き起こしています。でき

れば、ここでの仕事が全部片づいたら、すぐにでもパリへ行きます。妻も子どもも本も、何もかもおい
て。」(Nr.575, Bruckberg, 3. März 1848)
一八四八年三月三日、フョイエルバッハ (Ludwig Andreas Feuerbach) からライプチヒの出版者オッ
トー・ヴィガンツ (Otto Wigand) に宛てて出された書簡は、このような心躍る言葉で書き始められて
いる。

この年二月二二日に始まったパリの民衆蜂起は即刻隣国ドイツに伝えられ、二月二七日マンハイムで
開かれた民衆集会には約二五〇〇人の市民が集まった。

(中略)

フョイエルバッハは当時、自ら編集する著作集のために、既刊著書の改訂作業に専念していた。大学
での就職を断念し、ブルックベルグという小さな村の陶器工場の一室を仕事場として、主著の一つであ
る『キリスト教の本質』を始めとしていくつかの著書論文を書き、世間にその存在を示していたが、マ
ルクスとルゲによって企画された『独仏年誌』への協力を断るなど、地道な文筆活動以上の行動をか
れは控えていた。その彼も、一八四八年の革命の報を聞き、ついにその身体を社会へと向け動かし始め
たのである。

なお、この頃、ハイデルベルグ大学の学生らをはじめとして、フョイエルバッハを代議士としてフランク
フルト国民議会へ送り出す動きがあった。その動きはすぐに潰えるが、フョイエルバッハが当地でみたもの
は、ヨーロッパの革命が混迷していく過程に他ならなかった。

・柴田隆行「革命の批判的傍観者フョイエルバッハ——一八四八年の書簡から」、『情況』第三期第十卷
第一号（情況出版、一九九九年一月）一四七～一四八頁

一七八九年のフランス大革命が恐怖政治を招いて終わったとき、ヘーゲルは歴史哲学講義のなかで、
それはこの革命が「宗教改革なき革命」だったからだ、と語った。ヘーゲル哲学神学の隠れ蓑だと批判
したフョイエルバッハから学んだマルクスは、「ヘーゲル法哲学批判序説」冒頭で、「ドイツにとって宗
教の批判は本質的に終わっている」と書いた。フョイエルバッハの考えはおそらく、一八四八年革命の
挫折は、それが「宗教改革なき革命」だったからであり、しかもドイツでは「宗教批判が本質的に終わ
って」いないことに帰因する、というものではないだろうか。

↓フョイエルバッハの哲学をマルクス主義の源流として位置づけ、その傾向のみを過度に強調することは、
実生活においては政治運動から距離を置き、在野ではあれ、学術的な宗教批判に専念しようとしていた彼の
姿勢を軽んじることにはなるのではないか。

九. まとめ

ヘーゲル哲学における「精神」の実在性、及び、外在的な（神）を前提とする神学とむすびつけられた哲学体系を批判し、「意識」、「感覚」に還元する「人間学」によって価値観を転倒したところに、フオイエルバッハ哲学の意義があると考えられる。また、後続するマルクスやエンゲルスらに代表される唯物論的な思想に対しては、フオイエルバッハはあくまでも「感覚」に基づく思索を行っており、それは身体論を超え出るかたちで認識論的な探究にもなっていることから、彼の思索は、後世の唯物論とは一線を画していたといえる。

以上より、フオイエルバッハの哲学は、ヘーゲル左派の継承者、あるいはマルクス主義の源流といったかたちでの直線的な関係のみによって把握することにはできないと考えられる。「感覚」と「唯物論」とを結びつめるものは、感覚器官、そして身体である。河上睦子をはじめとする論者が指摘しているように、フオイエルバッハの哲学は、一九九〇年代以降、後世の身体的な探究とも接続することのできる論点として読まれてきた。そこには、資本主義的な構造や階級闘争を前景化していくマルクス主義との明確な異同があり、また、それは、主体性の哲学としての積極的な意味づけができるものといえるのではないか。フオイエルバッハの思想は、啓蒙思想、広義のヘーゲル左派と呼ばれる思想的系譜から、ひいてはマルクス主義に至るまでの思想史的な流れにおいて、それじたいに異端、先端、分岐を含みもつ異色の在野的思索の集大成として読まれるべきものであるといえる。

*発表者プロフィール：倉井香矛哉（くらい・かむや） イクトゥス・プロジェクト共同代表・白十字キリスト教社会主義研究会書記長 独立系研究者（文学研究者、音楽家）

学問芸術の運動体「イクトゥス・プロジェクト」の共同代表。西南学院大学国際文化学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了。日本学術振興会特別研究員DC1採用後、現在は独立系研究者として活動している。文学研究と並行するかたちで、学芸および研究誌にとどまらず市民向けイベント・講演会における学際研究、セクシュアリティ／ジェンダー批評についての研究発表を行っている。また、W. S. クラークや内村鑑三、新渡戸稲造の思想を継承する無教会キリスト教の後継者でもある（二〇一五年度以降、無教会全国集会準備委員、『内村鑑三研究』編集委員会事務局）。さらに、音楽家としてのアイドルユニットへの楽曲提供やチャリティーイベントへの参加を通じて、日本各地で活躍するアーティストたちによる文学場・芸術場の創出を目指している。